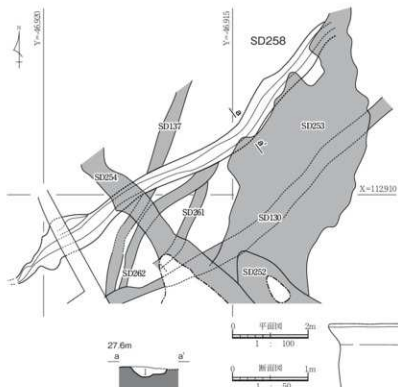
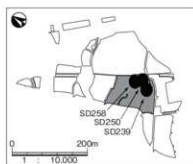


層名	色	画	Munsell	土質	粘性	粒度	堅硬度	備考
1	黒	褐	2.5Y3/1	砂質	なし	粗砂	疎	細礫を含む
2	黒	褐	2.5Y3/1	砂質	なし	粗砂	疎	細礫を含む。黒色細砂を筋状に含む



層名	色	画	Munsell	土質	粘性	粒度	堅硬度	備考
1	オリーブ黒		5Y3/1	砂質	なし	粗砂	密	



層名	色	画	Munsell	土質	粘性	粒度	堅硬度	備考
1	暗灰黄		2.5Y5/2	砂質	なし	中砂	疎	

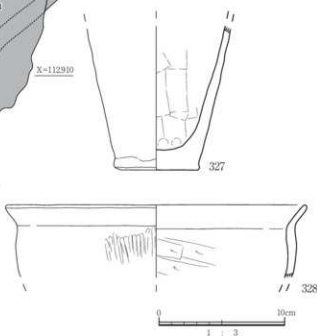


図156 SD239・SD250・SD258 平面・断面 SD258 出土遺物

83 SD250 (7区-SD44) 浅谷1-A

(1)遺構(図156) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-66°-Eである。規模は長軸が残存で8.00m、幅は0.40m～0.90m、最大深度は0.18mである。埋土は黒褐色砂質土である。SD266、古代のSD265・267に後出する。

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 古代のSD265・267に後出することから古代以降と判断できる。

84 SD258 (7区-SD54) 浅谷1-A

(1)遺構(図156) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-52°-Eである。規模は長軸が残存で11.00m、幅は0.20m～1.00m、最大深度は0.13mである。埋土は単層である。古代のSD253・254に先行し、SD262、弥生時代後期後葉のSD137に後出する。

(2)遺物(図156) 縄文土器3点、弥生土器片73点が出土した。このうち2点を図化した。

土器 327は弥生土器甕である。器壁は厚く、砂粒も粗い。328は弥生土器鉢の小片で、外面にはスス・コゲが付着している。

(3)時期 328から弥生時代後期後葉(V-4様式)の埋没と判断できる。

85 SD259 (7区-SD56) 浅谷1-A

(1)遺構(図157) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-26°-Eである。規模は長軸が残存で10.50m、幅は0.30m～1.10m、最大深度は0.10mである。埋土は単層である。古墳時代前期のSD136、古代のSD254に先行し、SD260に後出する。

(2)遺物(図157) 弥生土器片10点、土師器片7点が出土した。このうち2点を図化した

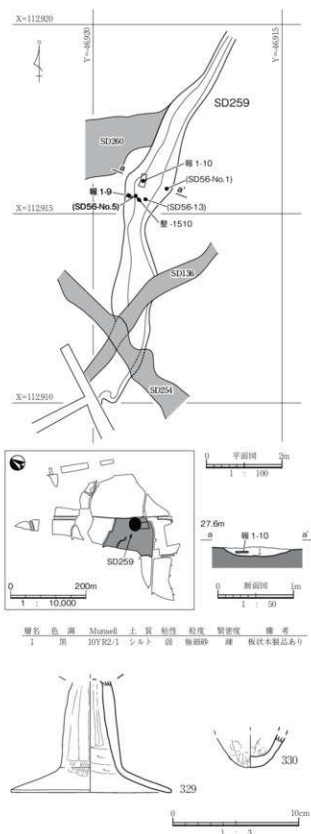


図157 SD259 平面・断面・出土遺物

た。

土器 土師器高杯329の脚部は強く屈曲する。330は小型の弥生土器鉢である。

(3)時期 329、および古墳時代前期(I.1～I.2期)のSD136に先行することから古墳時代前期(I.2期前後)と考えられる。

86 SD260 (7区-SD57)浅谷1-A

(1)遺構(図158) 北から東へ向きを変えて伸びる溝である。長軸長が残存で6.40m、幅は0.88m～1.55m、最大深度は0.50mである。埋土は複数層ある。古代のSD247・254、古墳時代前期のSD259に先行する。

屈曲地点付近に小型の土留め状遺構が設置されている。板の上に丸太を2段重ね、板の西側に

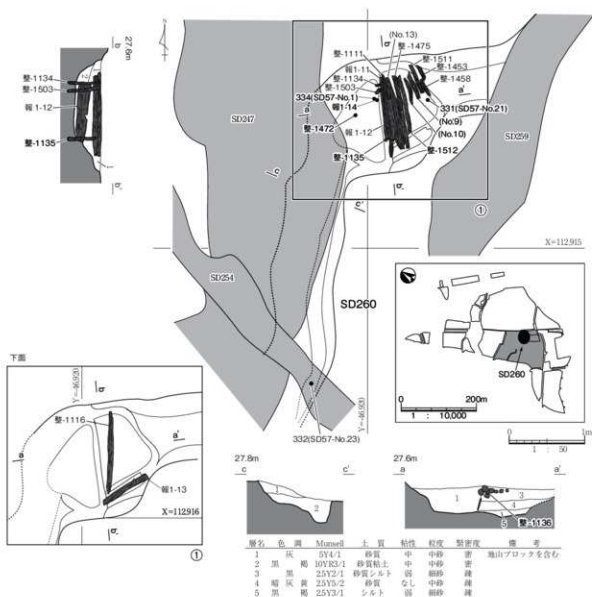


図158 SD260 平面・断面・遺物出土状況

は3本の杭が打ち込まれている。板の東側には裏込土の充填が認められる。最上段には丸太がほぼ同一のレベルで東へ向かって整然と並べられている。

(2)遺物(図159) 弥生土器片128点、土師質土器1点と木質遺物が出土した。このうち、木質遺物を除く6点を図化した。

土器 331～333は弥生土器壺である。広口壺331の内外面のハケはヨコナデにより消されている。333は外に向かって直線的に伸びる口縁部をもつ。胴部は楕円球状を呈する可能性がある。334・335は弥生土器甕である。334の胴部内外面には板ナデ、またはケズリが密におこなわれている。口縁部は整形が甘いためか、やや歪んでいる。335は外面と内面上部に粗いハケがおこな

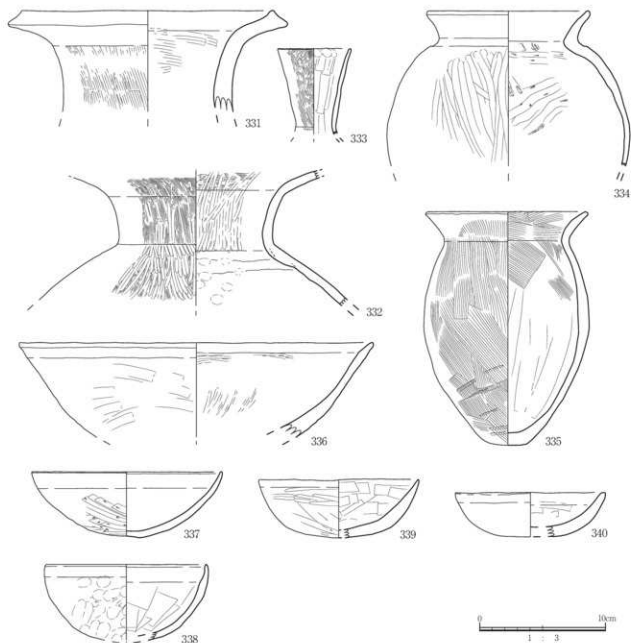


図159 SD260 出土遺物

われている。胴部下半と口縁部の外面にはスス・コゲが残る。336～340は弥生土器鉢で、うち336は大型で口縁部が外に直線的に開くタイプである。

(3)時期 335から弥生時代終末期(IV-1様式)の埋没と考えられる。

87 SD261 (7区-SD60) 浅谷1-A

(1)遺構(図160) 北東へ伸びる溝で、長軸長が残存で2.50m、幅は0.30m、最大深度は0.05mである。SD262、古代のSD254、SD262に先行する。

(2)遺物 弥生土器片14点が出土した。

(3)時期 SD262との関係から弥生時代後期としておきたい。

88 SD262 (7区-SD61) 浅谷1-A

(1)遺構(図160) 北東へ伸びる溝で、長軸長が残存で4.30m、幅は0.30m、最大深度は0.05mである。

(2)遺物 弥生土器片3点が出土した。

(3)時期 弥生時代後期後葉のSD130に先行することから、弥生時代後期と考えたい。

89 SD263 (7区-SD62) 浅谷1-A

(1)遺構(図160) 北東へ伸びる溝で、長軸長が残存で6.40m、幅は0.10m～0.70m、最大深度は0.18mである。埋土は単層である。

(2)遺物 弥生土器片41点が出土した。

(3)時期 出土した弥生土器から弥生時代後期中葉としておく。

90 SD264 (7区-SD64) 浅谷1-A

(1)遺構(図160) 北東へ伸びる溝で、長軸長が残存で9.20m、幅は0.40m～0.80m、最大深度は0.13mである。埋土は2層ある。

(2)遺物(図160) 弥生土器片22点、古代の須恵器1点などが出土した。このうち3点を図化した。

土器 341は弥生土器甕である。ヨコナデにより口頸部境の明瞭な屈曲と口縁部外面の凹線文が生じている。342は弥生土器鉢、343は須恵器蓋である。

(3)時期 342から弥生時代終末期(VI-2様式)と考えられる。

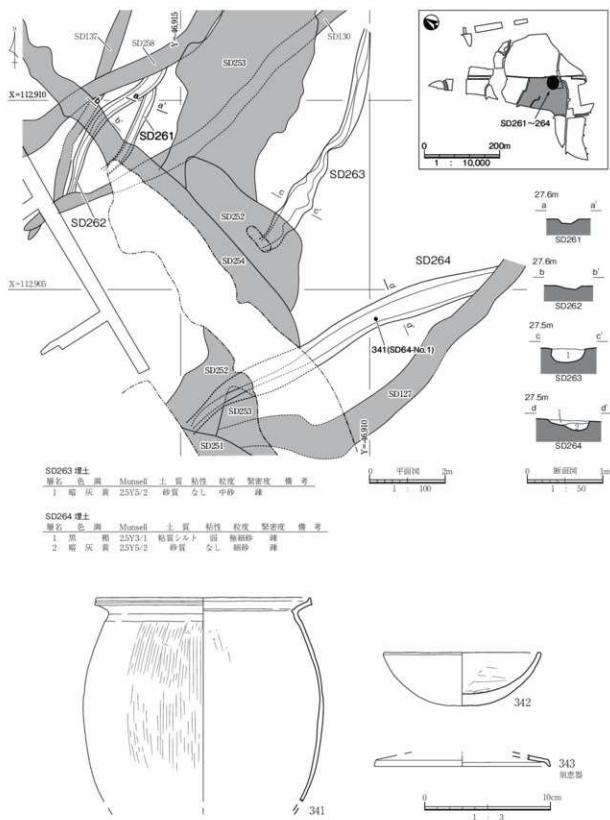
91 SD266 (7区-SD67) 浅谷1-A

(1)遺構(図161) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-10°-Eである。長軸長が残存で5.25m、幅は0.30m～0.40m、最大深度は0.08mである。古代以降のSD250に先行する。

(2)遺物(図161) 弥生土器片11点、須恵器片1点が出土した。このうち1点を図化した。

土器 344は弥生土器甕で、口縁端部が上方にわずかに拡張する。

(3)時期 344から弥生時代中期中葉(IV-1様式)と判断できる。



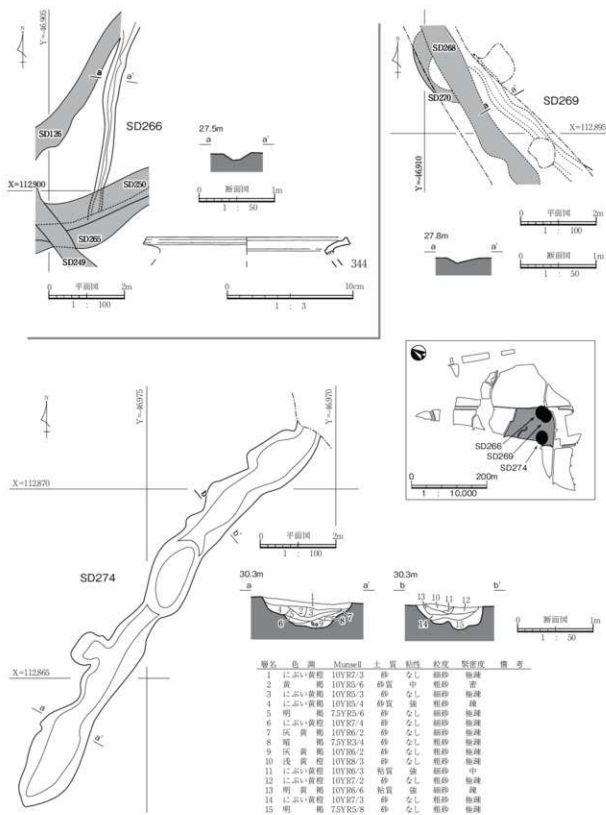


図161 SD266・SD269・SD274 平面・断面 SD266 出土遺物

92 SD269 (7区-SD70)_浅谷1-A

(1)遺構(図161) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-44° -Wである。長軸長が残存で4.40m、幅は0.40m、最大深度は0.05mである。

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 時期は不明である。

93 SD274 (7区-SR03)_低位段丘1-D

(1)遺構(図161) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-37° -Eである。長軸長が残存で12.50m、幅は1.10m～1.40m、最大深度は0.30mである。埋土は複数層ある。

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 時期は不明である。

94 SD275 (7区-SD32)_浅谷1-D

(1)遺構(図162) SR27左岸の肩沿いに北東へ伸びる溝で、長軸長が残存で45.00m、幅は0.20m～1.40m、最大深度は0.30mである。埋土は複数層ある。SR27を掘り下げる過程で検出された。上流からSR27へ導水するための溝とも考えられる。

(2)遺物(図162) 弥生土器片33点が出土した。このうち1点を図化した。

土器 345は口縁端部が若干上方に拡張する弥生土器甕である。

(3)時期 SR27堆積層の途中で検出されたため、SD27と同時期の弥生時代後期前葉～中葉(V-1～V-3様式)と考えられる。

95 SD277 (7区-SR06)_低位段丘1-C

(1)遺構(図163) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-40° -Eである。長軸長が残存で2.80m、幅は0.20m～0.40m、最大深度は0.15mである。埋土は単層である。

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 時期は不明である。

96 SD281 (10区-SD1)_低位段丘1-A

(1)遺構(図163) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-45° -Wである。長軸長が残存で2.00m、幅は0.15m～0.40m、最大深度は0.05mである。埋土は2層ある。

(2)遺物(図163) 弥生土器片124点が出土した。このうち6点を図化した。

土器 346は弥生土器甕で、上下に拡張する口縁部外面には4条の凹線文が巡る。347～349はや弥生土器甕である。347の口縁端部はやや拡張しているが、口頸部境の屈曲は弱い。350は弥生土器高杯で、脚部の矢羽根形透孔はわずかに貫通する。351は須恵器蓋である。

(3)時期 347・348から弥生時代後期前葉(V-2様式)と考えられる。

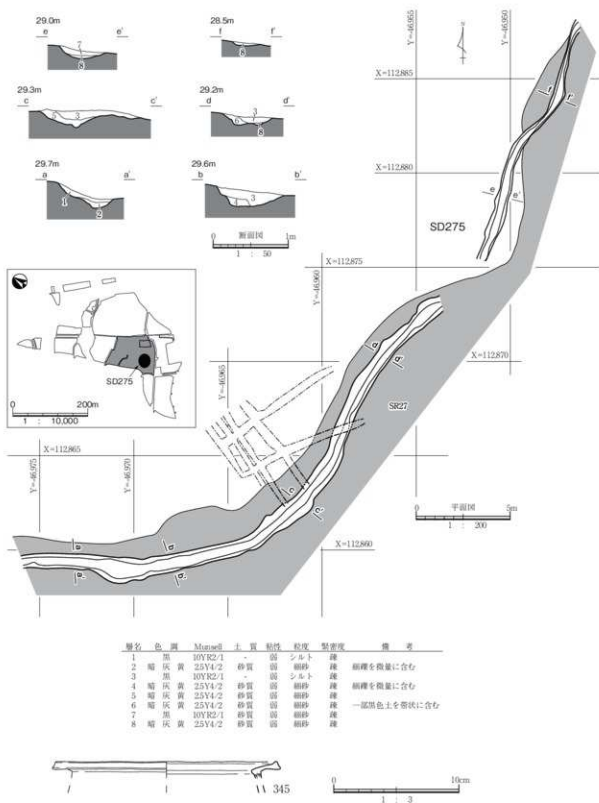


図162 SD275 平面・断面・出土遺物

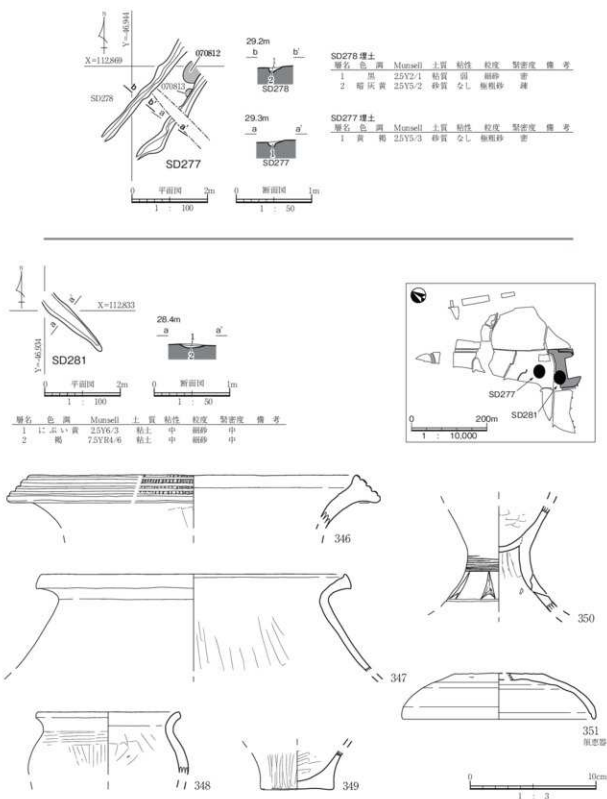


図163 SD277・SD281 平面・断面 SD281 出土遺物

97 SD283 (10区-SD5) 低位段丘1-A

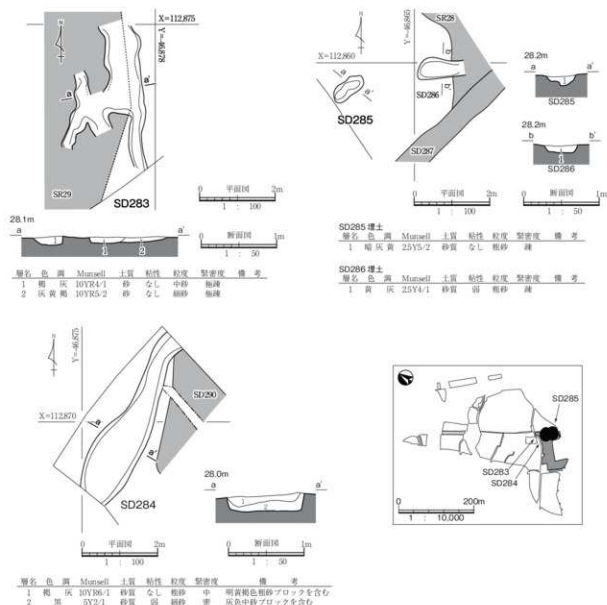
(1)遺構(図164) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-9°-Wである。3条の溝が重複した状態と考えられる。規模は長軸が残存で7.70m、幅は最大で1.80m、最大深度は0.10mである。埋土は2層ある。この2層がそれぞれの溝の埋土に対応すると考えられる。SR29との新旧関係は不明である。

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 新旧関係は不明だが、SR29と同時期の弥生時代終末期～古墳時代前期(VI-1様式～I-2期)と考えられる。

98 SD284 (10区-SD8) 低位段丘1-A

(1)遺構(図164) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-29°-Eである。長軸長が残存で4.65m、幅は



0.55m～1.25m、最大深度は0.20mである。埋土は2層ある。弥生時代終末期のSD290に後出する。

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 SD290と同時期の弥生時代終末期(VI-1～VI-2様式)としておきたい。

99 SD285 (10区-SD9)_低位段丘1-A

(1)遺構(図164) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-50° -Eである。長軸長が0.95m、幅は0.40m、最大深度は0.10mである。埋土は単層である。

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 時期は不明である。

100 SD287 (10区-SD11)低位段丘1-A/(10区-SR5)_低位段丘1-A

(1)遺構(図165) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-40° -Eである。長軸長が残存で21.00m、幅は0.60m～2.50m、最大深度は0.28mである。埋土は複数層ある。SK267に後出する。また、SR28の落ち込み付近でもSD287が後出している。

(2)遺物(図165) 縄文土器13点、弥生土器片81点、土師器片4点、須恵器片3点、石器が出土した。このうち5点を図化した。

土器 352は弥生土器甕で摩滅により調整は残っていない。353・354は弥生土器高杯である。353の杯部外面は分割ミガキの可能性ある。354の脚部下位の列点文は7個で1組となっているが、破片のため何組が巡っていたかは不明である。355は須恵器蓋である。

石器 356は凹基式のサヌカイト製石鏃である。

(3)時期 SD287との重複関係にあるSR28の落ち込み際は弥生時代後期(V-1～4様式)の層と推測されるため、SD287も同時期の弥生時代後期(V-1～4様式)と考えたい。355等はSD287を被覆する層に伴うものだろう。

101 SD288 (10区-SR1)_低位段丘1-A

(1)遺構(図166) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-68° -Wである。長軸長が残存で18.00m、幅は1.20m～1.90m、最大深度は0.40mである。埋土は複数層ある。土層断面b-b'の土層堆積状況からは、大きく三つの埋没単位(単位①：第1層～第4層、単位②：第5層、単位③：第6層)が確認できる。数回に分かれて埋土が堆積し、SD288は埋没したと考えられる。SD289・291、弥生時代終末期～古墳時代前期のSR29に後出する。

(2)遺物 縄文土器片1点、弥生土器片49点が出土した。

(3)時期 弥生時代終末期～古墳時代前期(VI-1様式～I-1期)のSR29に後出することから、古墳時代前期(I-2期)と考えられる。

102 SD289 (10区-SR2)_低位段丘1-A

(1)遺構(図167) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-64° -Wである。長軸長が残存で22.60m、幅は

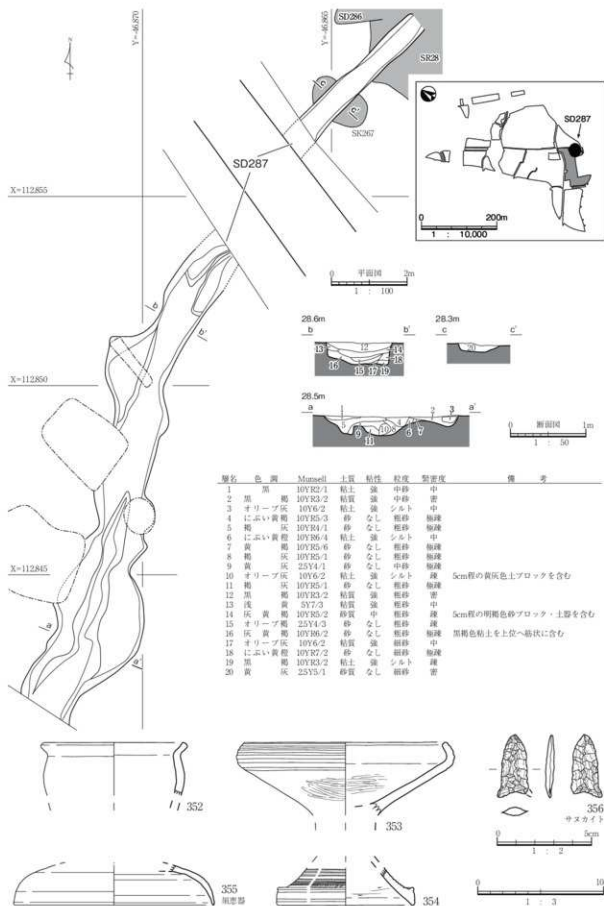


図165 SD287 平面・断面・出土遺物

1.10m～2.80m、最大深度は0.15mである。埋土は複数層ある。古墳時代前期のSD288に先行し、SD291、弥生時代終末期～古墳時代前期のSR29に後出する。

(2)遺物(図167) 縄文土器片1点、弥生土器片33点が出土した。このうち2点を図化した。

土器 357・358は弥生土器甕で、357の口縁端部には凹線文が認められない。

(3)時期 古墳時代前期(I-2期)のSD288に先行し、弥生時代終末期～古墳時代前期(VI-1様式～I-1期)のSR29に後出することから、古墳時代前期(I-2期)と考えられる。

103 SD290 (10区-SR3)_低位段丘I-A

(1)遺構(図168) 北へ伸びる溝で、長軸方向はN-4°-Wである。長軸長が残存で14.30m、幅は0.60m～1.50m、最大深度は0.55mである。埋土は複数層ある。土層断面a-a'とb-b'はそれぞれ大きく三つの単位に分けられる。弥生時代終末期のSD284に先行する。

(2)遺物(図169・170) 弥生土器片135点、石器が出土した。このうち13点を図化した。

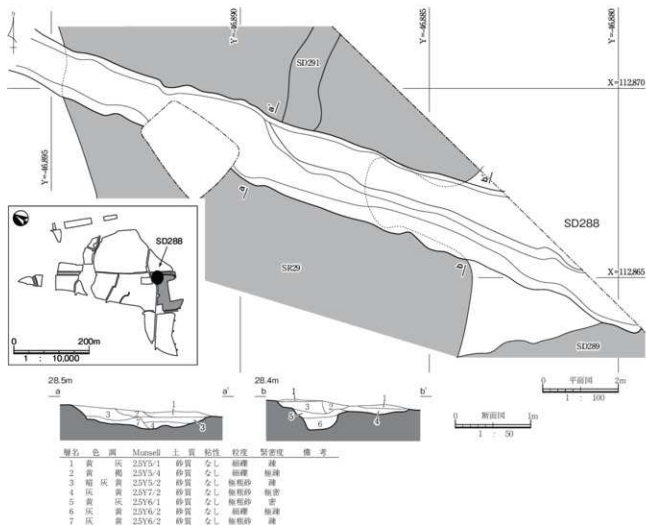


図166 SD288 平面・断面

土器 359～362は弥生土器壺である。360は口縁部がやや外反し、口縁端部は拡張しない。361は算盤玉状の胴部で、細い頸部と細い脚部が接合すると推測される。底部362は器壁が厚く、粗い砂粒を胎土中に含む。363～365は弥生土器甕で、いずれもヨコナデにより口縁端部外面の凹線文と口頸部境の強い屈曲を伴う。366は弥生土器高杯である。複数条を1組とする沈線文帯が3か所に施される。367は小型のため弥生土器鉢とした。368は弥生土器杯の脚部で、端部に列点文が巡る。369は弥生土器支脚である。

石器 370は淡い緑色を呈する緑色岩製の両刃石斧で、縦方向に割れており残存するのは約半分である。平面形は基部に向かってすぼむ。基部と側面に敲打痕跡が残る。風化により表面の残りは必ずしも良好ではないが、敲打箇所を除き、全体的に研磨されている。371は安山岩製の砥石で、A面の上下方向と左側を欠損する。A面とB面に使用に伴う擦痕が認められる。

(3)時期 支脚369、および弥生時代終末期(VI-1～VI-2様式)のSD284に先行することから弥生時代終末期(VI-1～VI-2様式)と考えられる。ただし、その他の遺物は弥生時代中期後葉～後期前葉(IV-2～V-2様式)を示すものが多い。

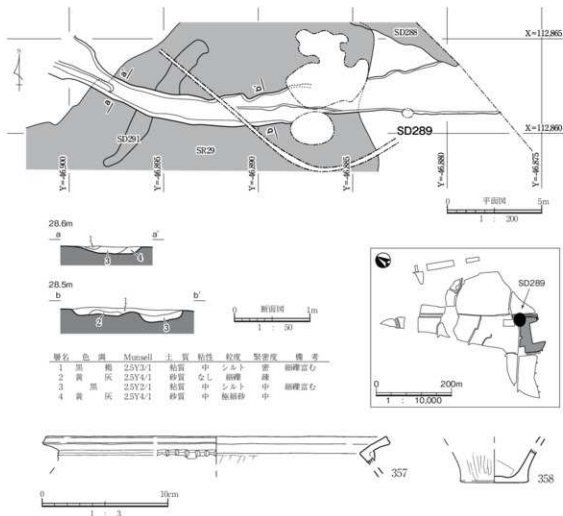


図167 SD289 平面・断面・出土遺物

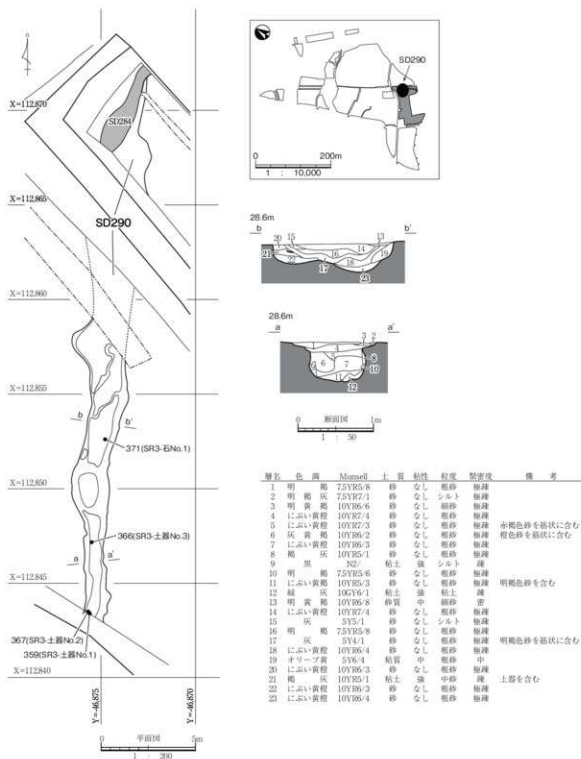


図168 SD290 平面・断面

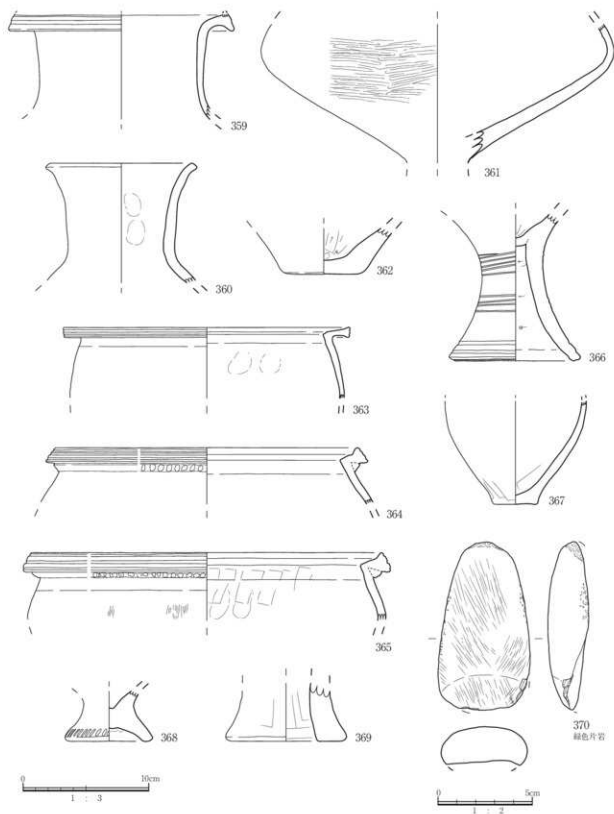


図169 SD290 出土遺物 1

104 SD291 (10区-SR6)_低位段丘1-A

(1)遺構(図171) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-34° -Eである。長軸長が残存で22.60m、幅は0.50m～1.00m、最大深度は0.45mである。埋土は複数層ある。古代のSD282、古墳時代前期のSD288・289に先行する。

(2)遺物(図171) 縄文土器片2点、弥生土器片85点が出土した。このうち1点を図化した。

土器 372は矢羽根形透孔をもつ弥生土器高杯である。

(3)時期 372から弥生時代中期後葉(IV-2～IV-3様式)と判断できる。

105 SD293 (10区-SR8)_低位段丘1-A

(1)遺構(図172) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-65° -Wである。規模は長軸が残存で3.45m、幅は0.15m～0.30m、最大深度は0.03mである。

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 SR13に接続する溝とみれば、SR13と同時期の古墳時代前期(I-1～I-2期)と考えられる。

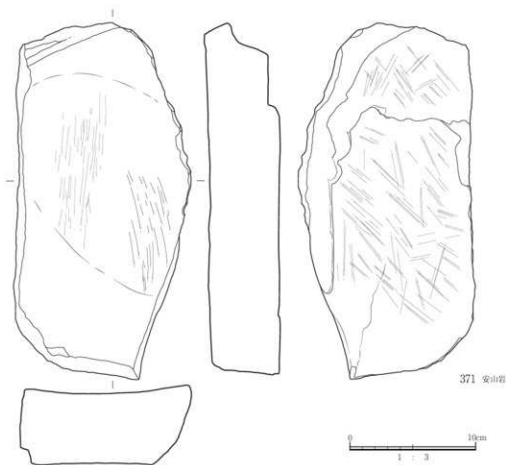


図170 SD290 出土遺物 2

106 SD294 (10区・SR9) 低位段丘1-A

(1) 遺構(図173) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-65°-Wである。長軸長が残存で13.20m、幅は0.35m~1.00m、最大深度は0.20mである。埋土は複数層ある。

(2) 遺物 遺物は出土していない。

(3) 時期 SR13に接続する溝とみれば、SR13と同時期の古墳時代前期(I-1~I-2期)と考えられる。

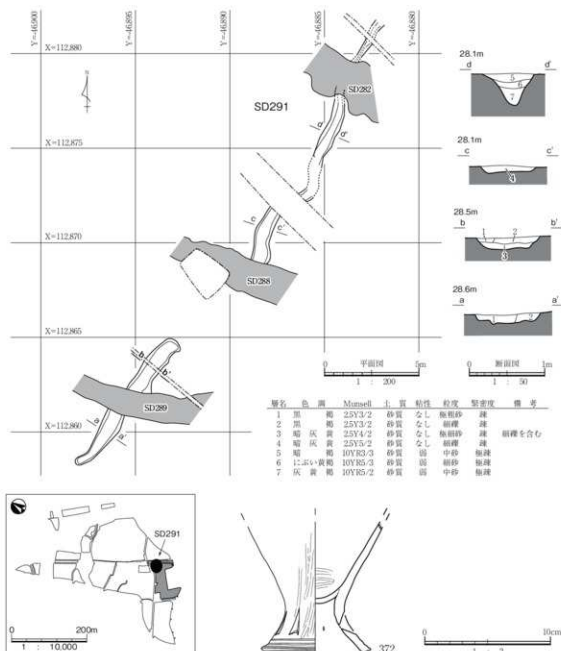


図171 SD291 平面・断面・出土遺物

107 SD295 (11区-SD01)_低位段丘1-A

(1)遺構(図174) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-50° -Wである。長軸長が残存で1.60m、幅は0.15m～0.60m、最大深度は0.05mである。埋土は単層である。

(2)遺物 弥生土器片3点が出土した。

(3)時期 出土した弥生土器は細片であるため明確な時期は不明である。したがってSD295の時期は弥生時代としておきたい。

108 SD296 (11区-SD02)_低位段丘1-A

(1)遺構(図174) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-48° -Wである。長軸長が残存で4.60m、幅は0.15m～0.60m、最大深度は0.18mである。埋土は単層である。

(2)遺物(図174) 弥生土器片36点が出土した。このうち5点を図化した。

土器 373～374は弥生土器甕で、いずれも口頸部境の屈曲は弱い。375は弥生土器高杯脚部で円形透孔が穿たれる。

(3)時期 373～375から弥生時代後期中葉(V-3様式)を中心とした時期の埋没とみられる。

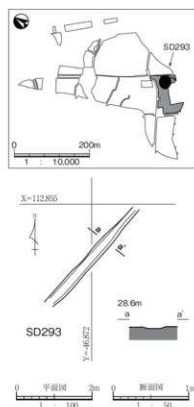


図172 SD293 平面・断面

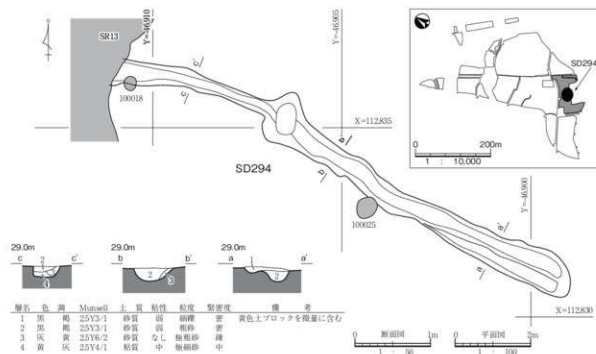


図173 SD294 平面・断面

109 SD297 (11区-SD03)_低位段丘1-A

(1)遺構(図174) 北西へ伸びる溝で、長軸長が残存で5.20m、幅は0.15m～0.70m、最大深度は0.10mである。埋土は単層である。弥生時代後期中葉のSD296に後出する。

(2)遺物 弥生土器片9点が出土した。

(3)時期 SD296と同時期の弥生時代後期中葉(V-3様式)としておきたい。

110 SD298 (11区-SD04)_低位段丘1-A

(1)遺構(図174) 北西へ伸びる溝で、規模は長軸が残存で2.50m、幅は0.20m～0.40m、最大深度は0.10mである。埋土は単層である。

(2)遺物(図174) 弥生土器片14点が出土した。このうち3点を図化した。

土器 376は弥生土器無頸壺の口縁部である。377は弥生土器甕の口縁部片だろう。弥生土器鉢378は口縁部が内傾しつつ立ち上がる。

(3)時期 378、および周辺の溝から弥生時代後期中葉(V-3様式)と考えておく。

111 SD299 (12区-SD01)_低位段丘1-C

(1)遺構(図175) 長軸が東西方向の溝である。地形から判断すると、東へ向かって伸びる溝の蓋然性が高い。長軸長は残存で3.65m、幅は0.90m～1.35m、最大深度は0.13mである。埋土は2層ある。

(2)遺物 弥生土器片1点、陶器片1点が出土した。

(3)時期 SD299の時期は弥生時代としておきたい。周辺の遺構との関係から陶器片は混入と考えられる。

112 SD300 (12区-SD02)_低位段丘1-C

(1)遺構(図175) 北東へ伸びる溝で、長軸長は残存で0.85m、幅は最大で0.35m、最大深度は0.03mである。

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 時期は不明である。

113 SD301 (12区-SD03)_低位段丘1-C

(1)遺構(図176) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-48°-Wである。長軸長が残存で4.90m、幅は0.45m～1.00m、最大深度は0.05mである。埋土は単層である。時期不明のSK274に後出する。

(2)遺物(図176) 弥生土器片94点が出土した。このうち6点を図化した。

土器 379～381は弥生土器壺で、379・381の頸部には削り出し突帯状の文様が認められる。弥生土器甕382・383は如意形口縁を有する。384は弥生土器鉢である。

(3)時期 379～384から弥生時代前期後葉(I-3様式)と考えられる。

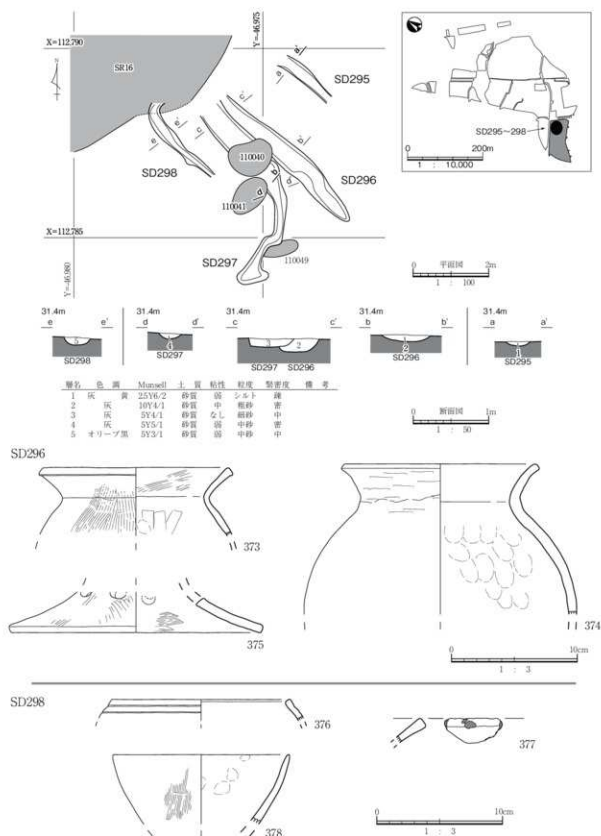


図174 SD295～SD298 平面・断面 SD296・SD298 出土遺物

114 SD302 (12区-SD04)_低位段丘1-C

(1)遺構(図175) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-33°-Eである。長軸長が残存で1.50m、幅は最大で0.65m、最大深度は0.25m、埋土は単層である。

(2)遺物 弥生土器片6点が出土した。

(3)時期 時期は不明である。

115 SD303 (12区-SR3)_低位段丘1-D

(1)遺構(図177) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-49°-Wである。長軸長が残存で13.20m、幅は0.20m~0.70m、最大深度は0.20mである。埋土は単層である。SR27の古い段階の流路の可能性もある。

(2)遺物 弥生土器片5点が出土した。

(3)時期 弥生時代後期前葉~中葉(V-1~V-3様式)のSR27に先行することから、弥生時代後期前葉(V-1様式)以前だろう。

116 SD304 (11区-SD06)_低位段丘1-A

(1)遺構(図177) 平面形が弧を描くような溝で、長軸が残存で7.60m、幅は0.15m~0.60m、最大深度は0.10mである。埋土は単層である。

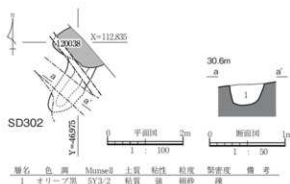
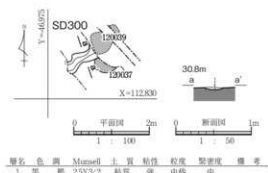
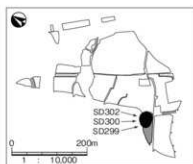
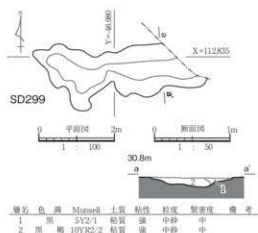


図175 SD299・SD300・SD302 平面・断面

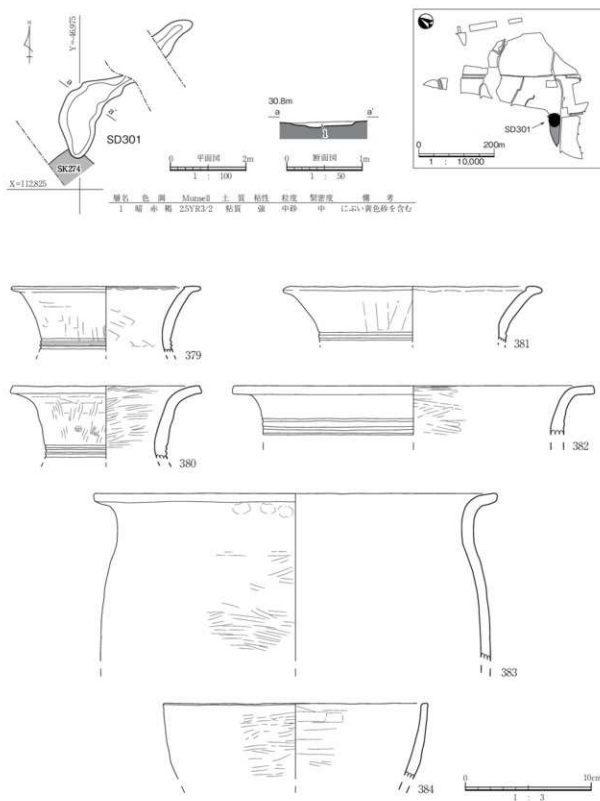


図176 SD301 平面・断面・出土遺物

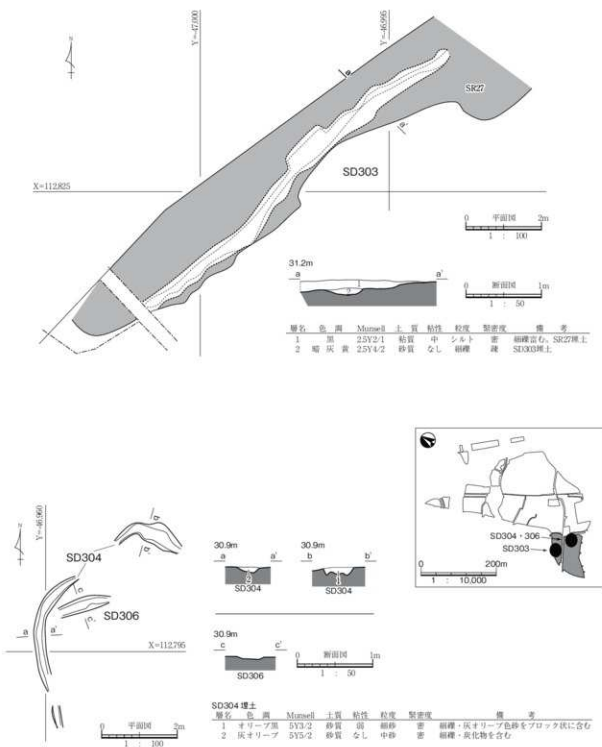


図177 SD303・SD304・SD306 平面・断面

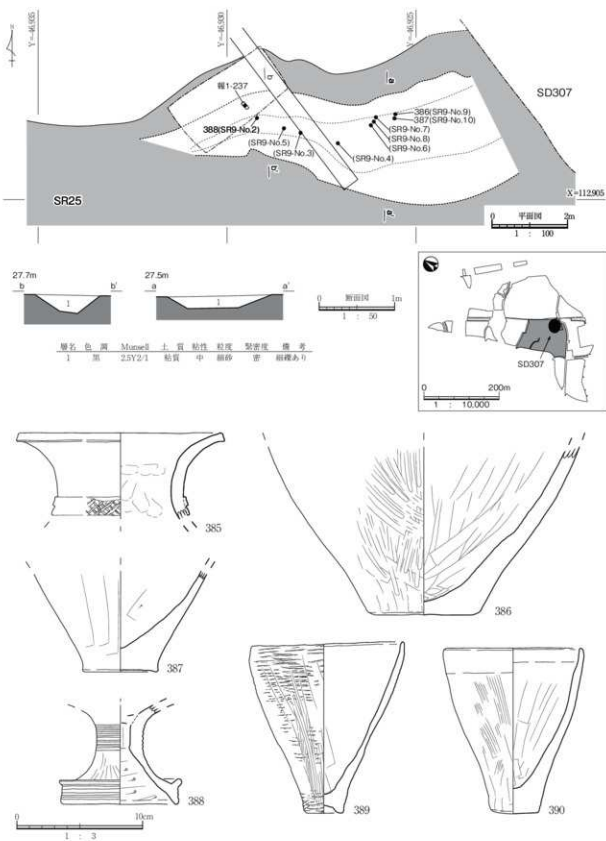


図178 SD307 平面・断面・出土遺物

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 時期は不明である。

117 SD306 (11区-SD04)_低位段丘1-A

(1)遺構(図177) 北東へ伸びる溝で、長軸方向はN-74° -Eである。長軸長が残存で1.45m、幅は0.25m～0.40m、最大深度は0.04mである。

(2)遺物 弥生土器片14点が出土した。

(3)時期 出土した弥生土器から弥生時代後期中葉としておきたい。

118 SD307 (7区-SR9)_浅谷1-A

(1)遺構(図178) 蛇行しながら北東へ伸びる溝で、長軸長が残存で9.10m、幅は0.80m～3.30m、最大深度は0.25mである。埋土は単層である。

(2)遺物(図178) 6点を図化した。

土器 385は弥生土器壺である。頸部には斜格子文突帯が認められる。口縁端部は拡張しない。386・387は弥生土器壺の底部である。388は弥生土器高杯の脚部で、拡張する端部に2条の凹線文、杯部直下に7条の沈線文が巡る。389・390は体部から口縁部にかけて直線上に開く鉢である。

(3)時期 389から弥生時代後期中葉(V-3様式)を中心とした時期と考えられる。

119 SD308 (7区-SD10)

(1)遺構(図179) 北西へ伸びる溝で、長軸方向はN-27° -Wである。長軸長が残存で3.70m、幅は0.80m～1.75m、最大深度は0.20m、埋土は2層である。弥生時代終末期のSI19、古代のSD36に先行する。

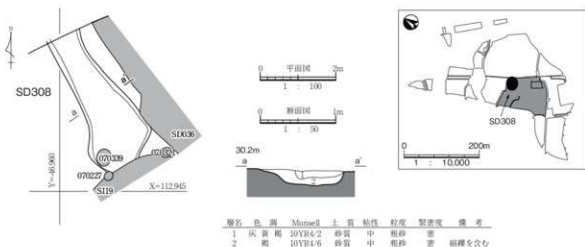


図179 SD308 平面・断面

(2)遺物 遺物は出土していない。

(3)時期 弥生時代終末期(VI-1様式)のSI19に先行することから、弥生時代終末期(VI-1様式)以前と考えられる。

(遺構：石貫、土器：乗松・山口、石器：乗松、時期：乗松・石貫)

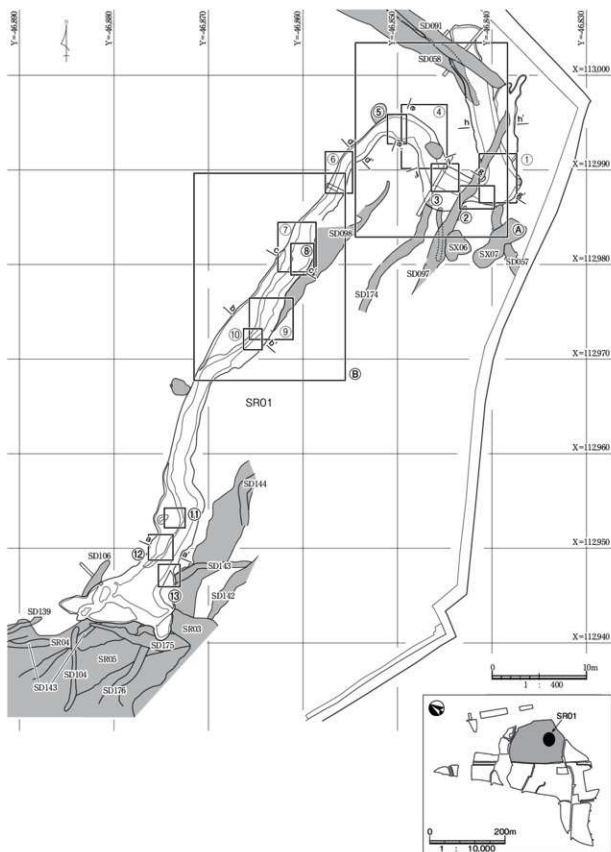
第6節 流路

1 SR01 (4区-SR1)_浅谷I-A/(4区-SR5)_浅谷I-A

(1)遺構(図180～189) 北東へ伸びる流路で長軸方向はN-30°-Eである。大きくは南から北へ流れるが、北端付近で蛇行する。最大深度は0.60mで埋土は複数層ある。断面a-a'(図版58)では8層に分層される砂層のみを埋土とするが、断面b-b'などでは砂層に先行する粘質土層もSR01の埋土と認識した。埋土は大きく四つの単位に分けることが可能である。単位①は基本的に砂層からなり、この層から多くの遺物が出土した。単位②はシルト層と極細砂層の互層堆積層で、断面a-a'で地山層と認識した土層である。単位③は腐植土層由来の黒色のシルト層が主体の土層である。単位④は単位③と類似する腐植土層由来のシルト層である。単位③よりも若干緑がかった色調であることから層を分けたが、単位③・④は同一の単位ととらえることも可能である。単位③・④からはある程度の植物残滓や種子などが出土することから、一定期間水が滞留し、湿地帯を形成していた可能性も考えられる。断面b-b'では、単位②～④が単位①に先行することから、単位①の段階で遺物を多量に含有する砂層が短期間で流れてきた状況がうかがえる。SR02とは端部で重複関係にあり、記録ではSR01がSR02に後出するが、多くの遺物の出土状況や時期の近さを考慮すると、SR01とSR02は同一の遺構であった可能性もある。

(2)遺物(図190～198) 縄文土器片65点、弥生土器片8,585点、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器片1,447点、古代の土師器2点、古代の須恵器11点、土製品3点、石器56点と木質遺物が出土した。このうち、木質遺物を除く82点を図化した。

土器 391～405は弥生土器である。391の頸部にある2条間は削出突帯状を呈する。392は胴部最大径に刻目文突帯が付される。393は細い沈線文の下方に浮文のような文様が施されている。本来の文様の推測は難しい。394は口縁部内面に突帯を有する。396は比較的大型で頸部に突帯をもつ。391～396の胎土中に含まれる砂粒は粗い。397～400は短頸の広口壺で、口縁部が残存する397～399の口縁端部外面には複数条の凹線文が巡る。401・402は短頸の直口壺で頸胴部境には押捺突帯文が巡る。404は表面の摩滅が著しいが、口縁端部には2条の凹線文が確認される。406～411は土師器である。406の口縁端部はわずかに内側に肥厚し、胴部は球形である。二重口縁をもつ407の胴部はほぼ球状を呈する。408は高さ66cmを超える大型の複合口縁壺である。スス・コゲが内面の広い範囲に付着しており、特に口縁部内面に顕著にみられる。409～411は口縁部が外に開く直口壺で、410・411の口縁端部はわずかに外反する。412は土師器の小型の直口壺と推測される。413～415・418は如意形口縁、416は逆L字状口縁をもつ弥生土器である。417は内外



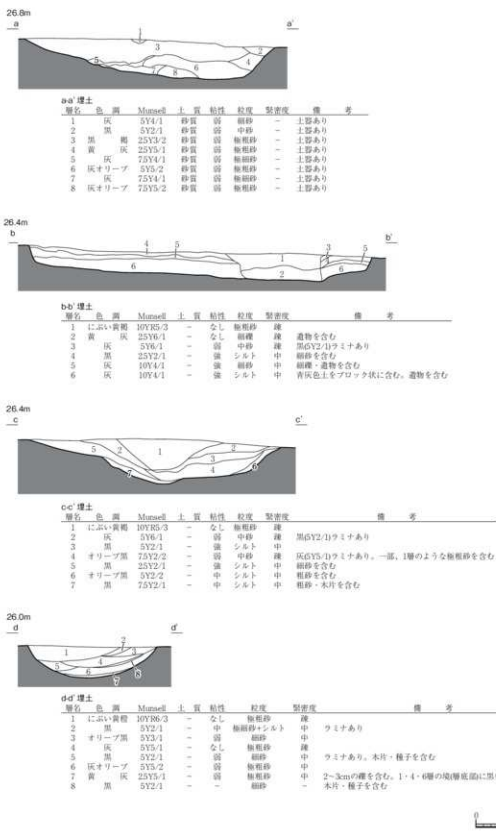


図181 SR01 断面 1

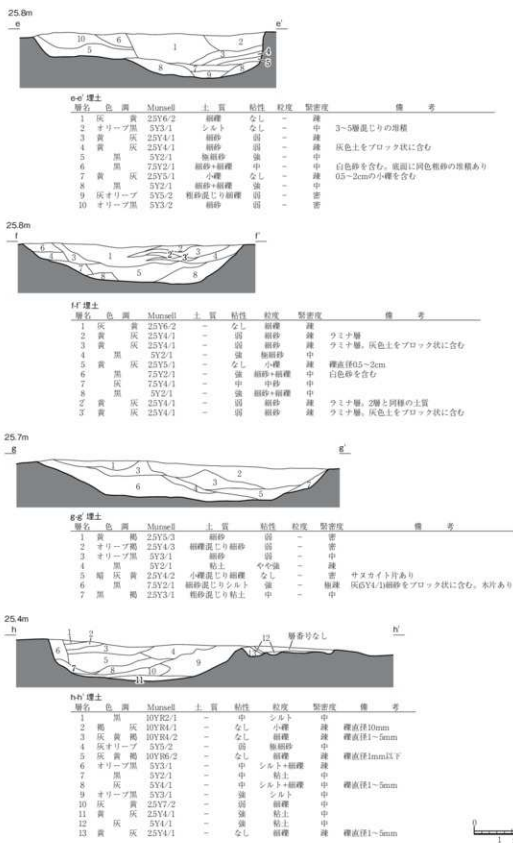


図182 SR01 断面 2

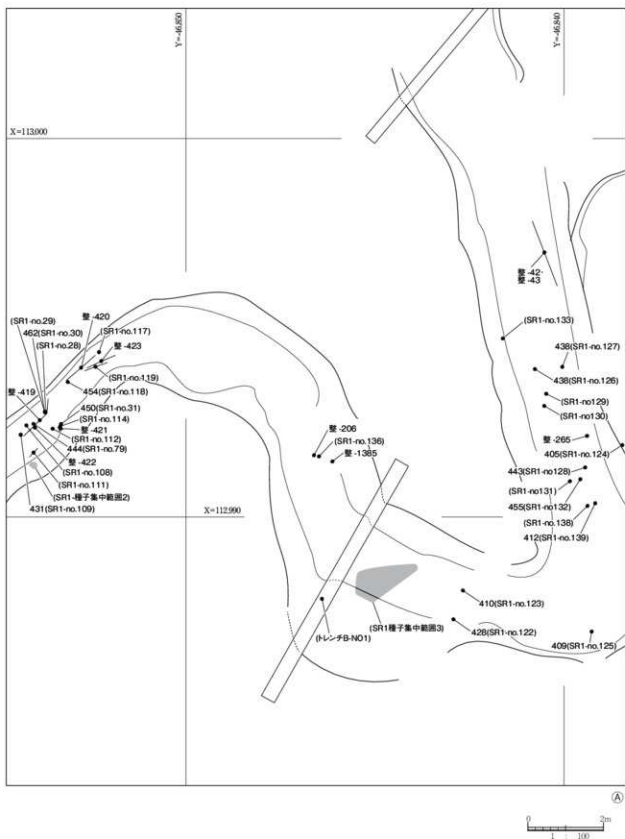


圖183 SR01 遺物出土狀況 1

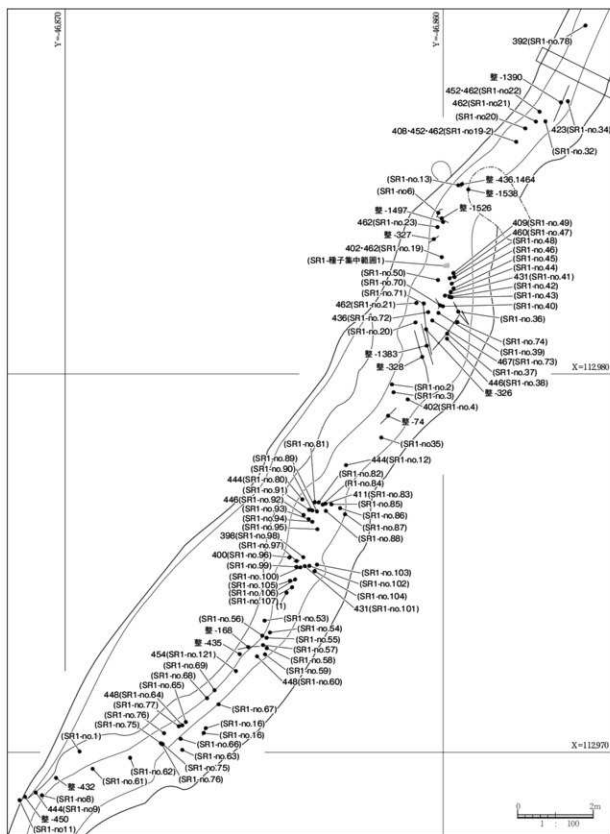
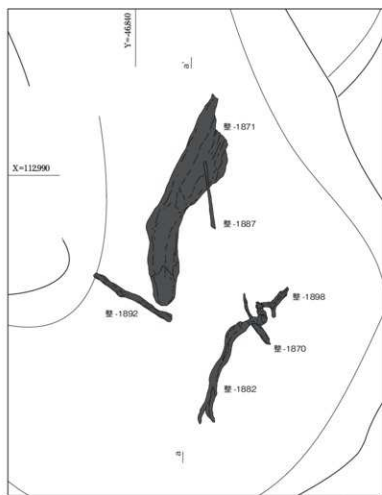
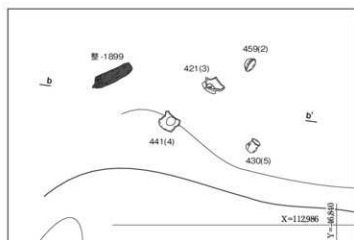


図184 SR01 遺物出土状況 2

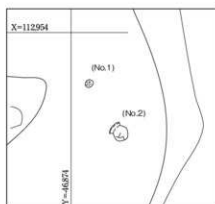
(B)



① (N10)



② (N9)



③ (N13)



図185 SR01 遺物出土状況 3

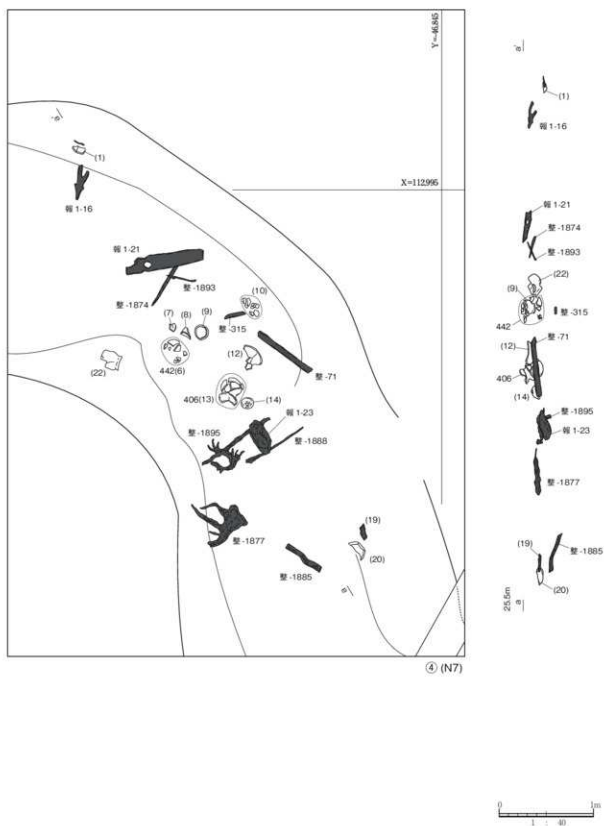


圖187 SR01 遺物出土狀況 5

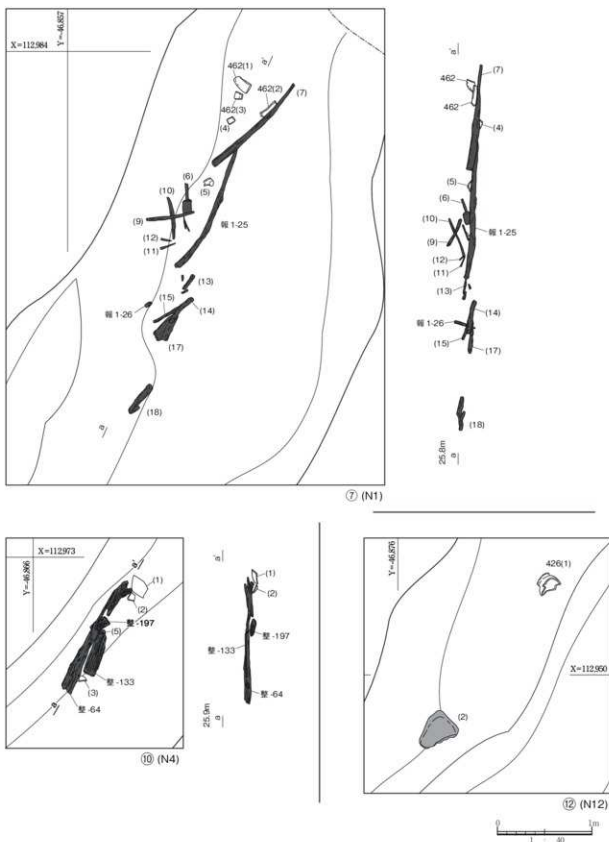
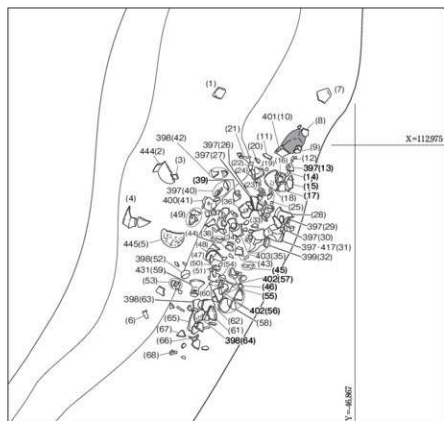
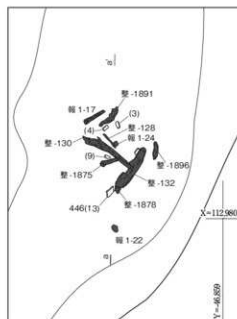


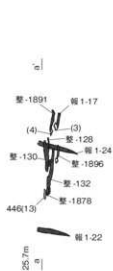
図188 SR01 遺物出土状況 6



⑨ (N2)



⑧ (N5)



⑬ (N11)



図189 SR01 遺物出土状況 7

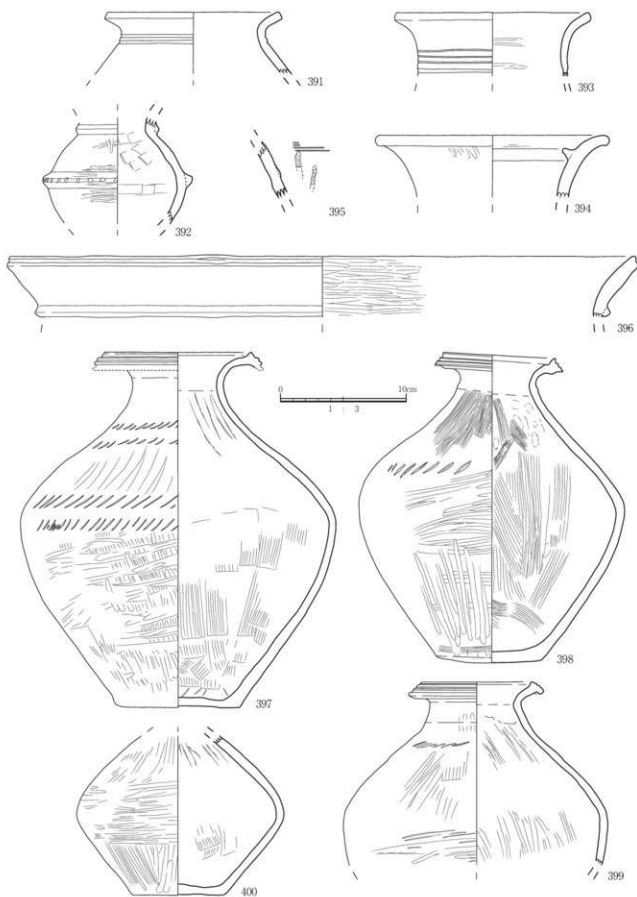


图190 SR01 出土遺物 1

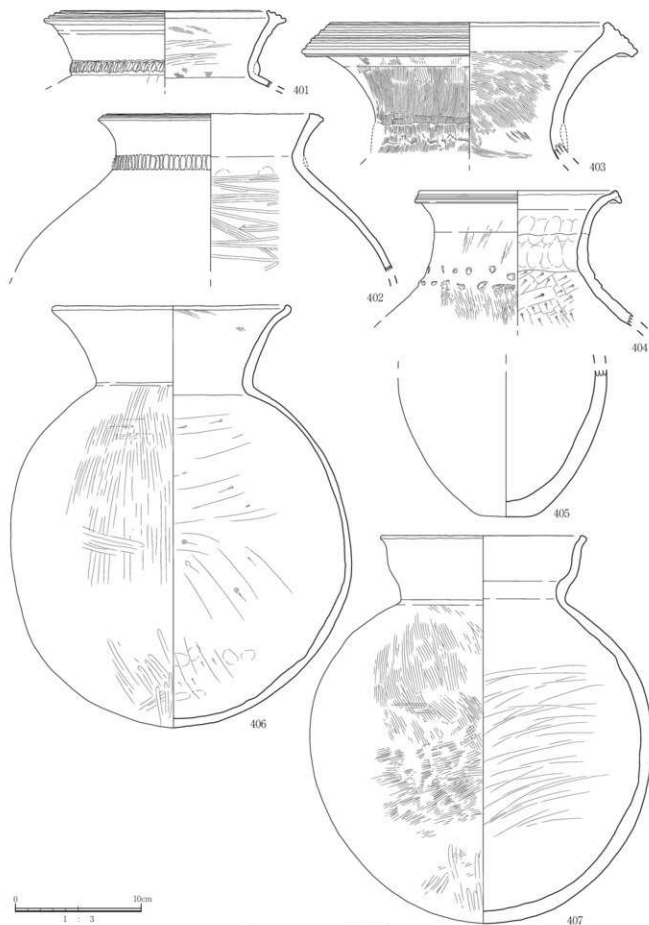


図191 SR01 出土遺物 2

面に強いヨコナデがおこなわれる弥生土器甕で、口縁端部は上方にやや肥厚する。419～430は土師器甕である。419の胴部は球形で口縁端部はわずかに内側に肥厚する。胴部内面の削りは頸胴部境にまで及んでいる。420・421も口縁端部がやや肥厚し、胴部内面のケズリが頸胴部境直下までおこなわれる。422は口縁部がわずかに外反しながら伸びる。胴部が球状を呈する423～427の胴部外面はハケ、内面は頸胴部直下までケズリが施される。口縁端部は肥厚しない。うち、底部まで残る423～425の胴部は球状を呈する。428～430は小型の甕で、いずれも短く外に伸びる口縁部を有する。431～434は弥生土器高杯である。431は水平に外に伸びる口縁部をもち、口縁部内面

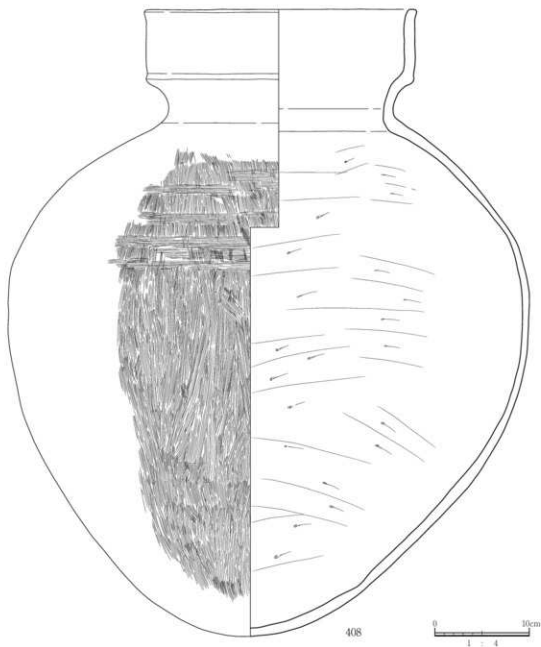


図192 SR01 出土遺物 3

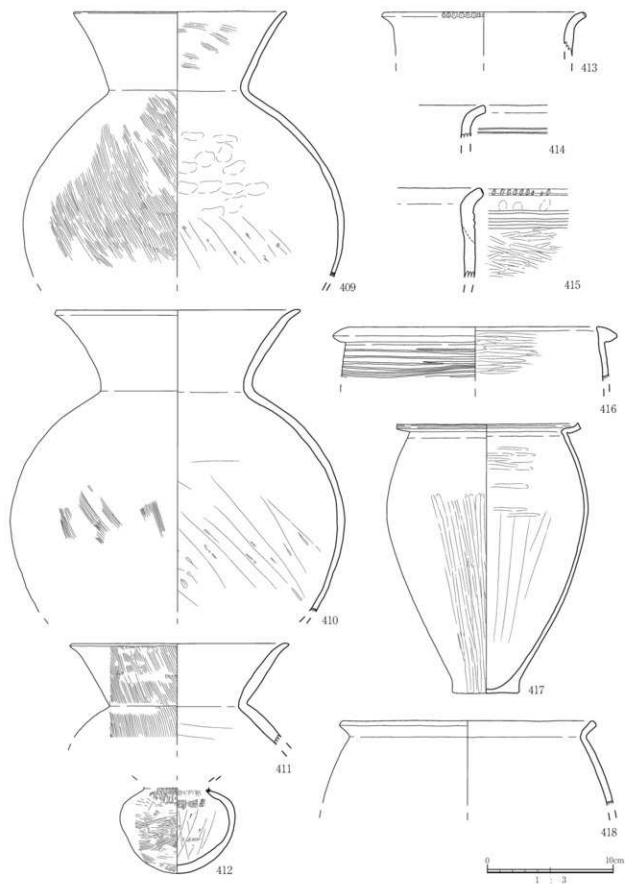


図193 SR01 出土遺物 4

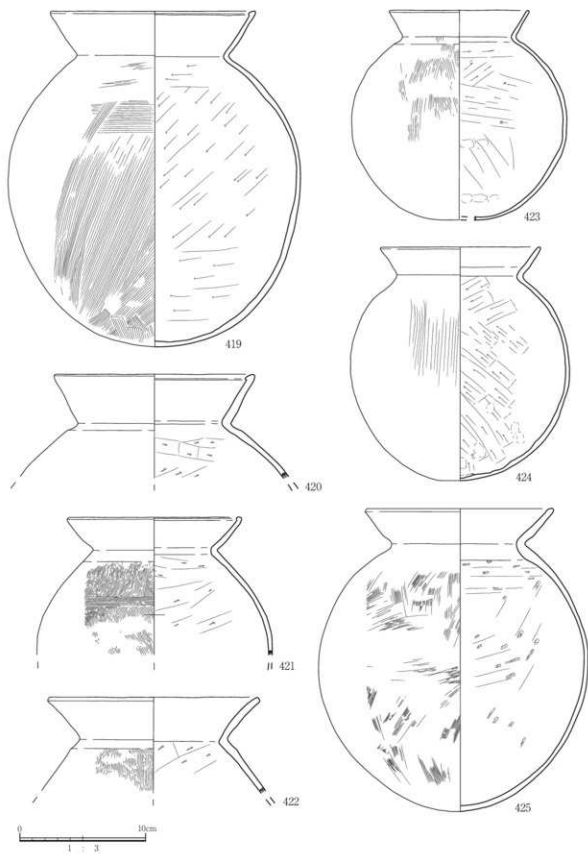


図194 SR01 出土遺物 5

には放射状のミガキ、杯部内外面には分割ミガキが認められる。脚部には2段の沈線文帯と2段の貫通しない矢羽根形透孔が施される。432・433の拡張する脚端部外面には数条の凹線文が巡る。435～443は土師器高杯で、435・436は杯部が深く、脚部がやや細身なタイプである。434は透かし孔間にシカが描かれている。437も同様のタイプだろう。438・439は杯部に明瞭な屈曲をもつ。440は杯部の途中でやや弱く屈曲する。441は杯部の屈曲から短く上方に伸びてさらに屈曲して口縁部にいたる。442・443の裾部は長く外に開く。いずれも3方と推測される円形透孔が穿たれている。444～448土師器の鉢で、胴部から屈曲して口縁部が整形される。444・445・447は丸底を呈する。449～458は弥生土器鉢である。449は底部からやや口縁部にかけてやや内湾する。450～455はボウル状の鉢である。458はやや粗雑なつくりで短い口縁部を有する。459～461は土師器小型丸底壺で、461は二重口縁をもつ。462は大型の土師器の二重口縁壺である。463は製塩土器、464・465は脚部をもつ小型の弥生土器鉢である。466は弥生土器蓋である。弥生土器鉢467は底部に焼成前穿孔が認められる。

石器 468は濃緑色を呈する緑色片岩製の石庖丁で、A面の紐孔から右側を欠損する。やや窪む箇所を除いた多くの範囲に研磨が施される。刃部は研磨により作出されるが、敲打により潰れている。背部調整は敲打、紐孔は回転穿孔法による。469はサヌカイト製のスクレイパーで表面の風化が著しい。刃部はA面からのみの加工である。刃部を除く3辺は分割、または切断により整形されている。背部に敲打痕は認められない。470はサヌカイト製石錐、471はサヌカイト製凹基式石鏃である。472はサヌカイト製尖頭器としたが、打製石剣とは形状、製作技術が異なる。

(3)時期 大半の土器が単位①とした砂層から出土している。弥生時代前期後葉、中期後葉の土器も一定量含まれるが、419・420・421などから単位①により短時間で埋没したのは古墳時代前期(I-2期)と考えられる。

2 SR02 (4区SR15) 浅谷1-A

(1)遺構(図199～203) 北西から北へ角度をかって伸びる流路で、長軸方向は北西方向がN-53°-W、北がN-8°-Eである。最大深度は0.75mである。埋土は複数層あるが、大きくは三つの単位に分かれる。単位①は砂層からなる単位で、断面b-b'では4層に分層できる。単位②は粘質土層と砂層が互層状に堆積する単位で、単位①に切られる位置に遺物が出土する。遺物が出土した層の下面は、単位①の下面と単位②の上面にあたる。SR02出土遺物の大半は単位①の最下層に伴うと考えられる。断面c-c'からは、単位③の腐植土混じり黒色シルト層が、単位②の砂層に切られた後、その上面に流れ込んでいる状況が確認できる。部分的にはグライ化した土層も堆積している。単位②の互層状の堆積は、砂層がまとまって堆積した後に、側面の単位③のシルト層が流れ込むことで形成されたと考えられる。

SR02はSD058・059・064・091・164・166に後出する。SN01との重複関係は断面では確認できないが、平面図による限りでは、SR02がSN01に後出する。SR01の項で述べたように、多くの遺物の出土状況や時期の近さからSR01とSR02は同一の遺構であった可能性がある。

(2)遺物(図204～210) 縄文土器片3点、弥生土器片1,019点、弥生時代終末期～古墳時代初頭

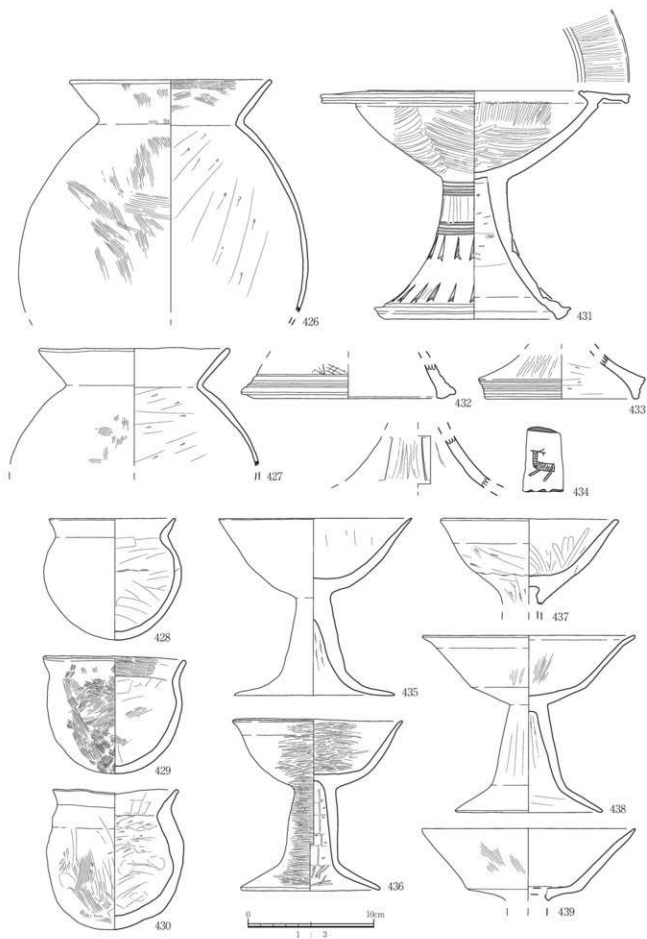


图195 SR01 出土遺物 6

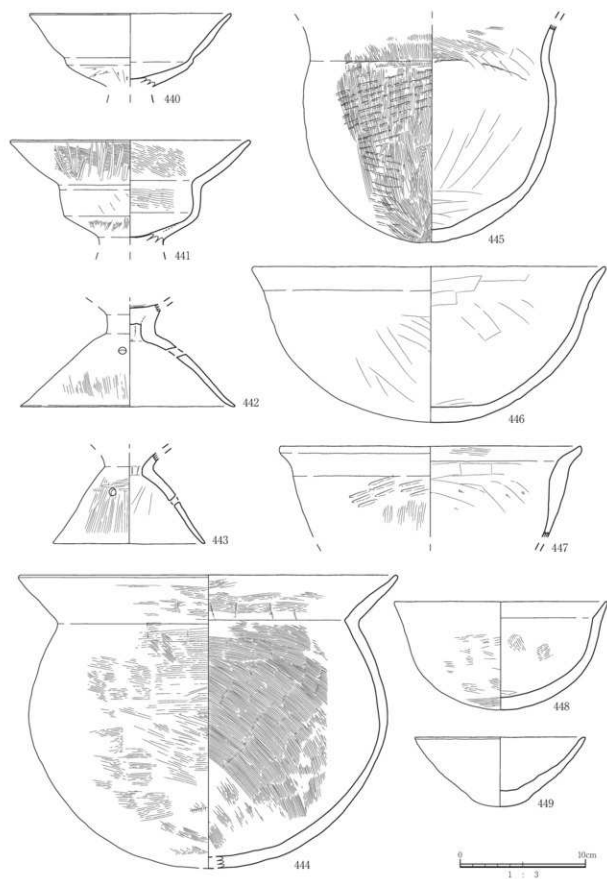


図196 SR01 出土遺物 7

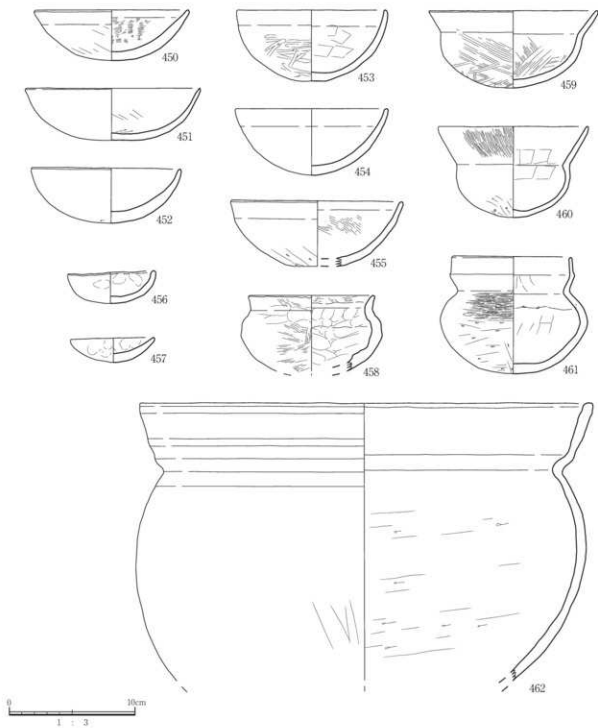


図197 SR01 出土遺物 8

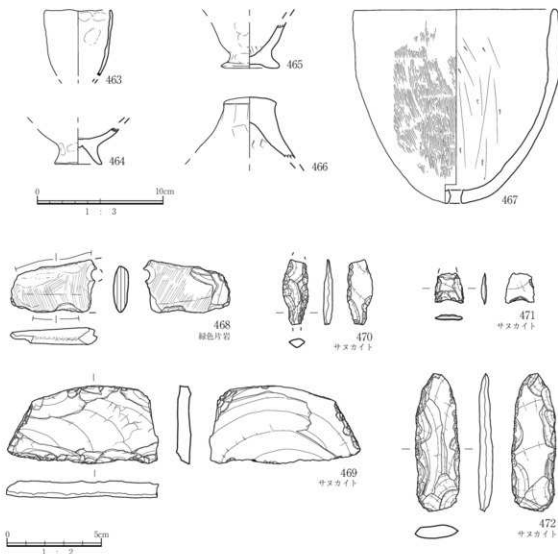
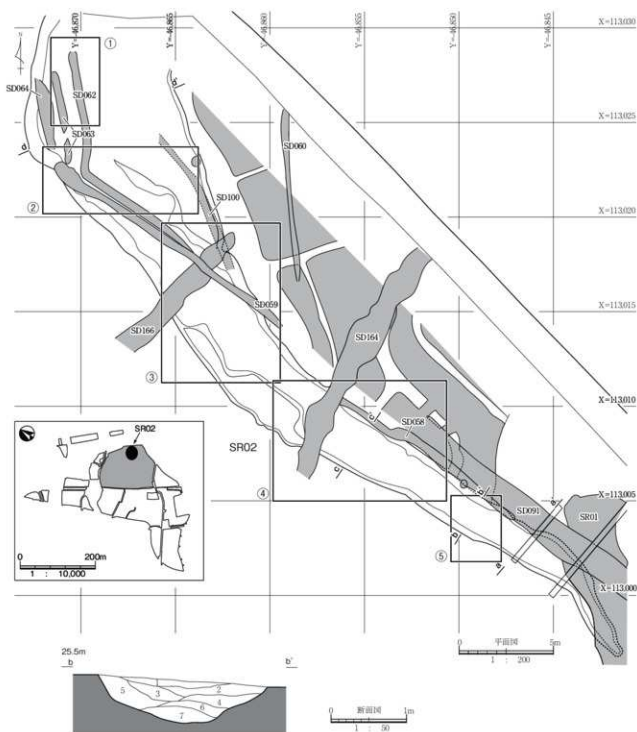


図198 SR01 出土遺物 9

の土器片619点、古代の土師器片1点、石器6点、木質遺物が出土した。このうち、木質遺物を除く弥生土器・土師器63点を図化した。

土器 473は弥生土器壺で頸胴部境を沈線文で区切る。474は弥生土器複合口縁壺の口縁部で外面に波状文と棒状浮文が施される。弥生土器広口壺475の口縁部はやや外反し、口縁端部若干拡張して凹線文を伴う。頸胴部境に貼付突帯、突帯直下に刺突文が認められる。476・477は弥生土器壺の底部である。478は土師器壺で、口縁端部は内面に向かって若干肥厚する。479は土師器甕で口縁部は外に向かって直線的に伸びる。480は土師器壺の口縁部、481は口縁部が短く直立する土師器壺である。482～502・505～508は土師器甕である。482・483・486・487の口縁短部は内側に肥厚し、胴部外面上半には縦方向のハケと横方向のハケ、または縦方向のハケがおこなわれて



b-b' 壕土

層名	色	調	Munsell	土質	粘性	粒度	堅硬度	備考
1	灰	黄	10YR5/2	-	なし	粗砂	中	
2	暗	灰	10YR4/1	-	なし	粗砂	中	
3	にぶい	黄橙	10YR6/3	-	なし	粗粗砂	中	
4	灰	黄	10YR4/2	-	なし	粗粗砂	中	
5	黒		10YR2/1	-	弱	粗砂	中	
6	暗		7.5YR4/6	-	なし	粗粗砂	中	
7	にぶい	黄	10YR5/3	-	なし	粗粗砂	中	

図199 SR02 平面・断面 1

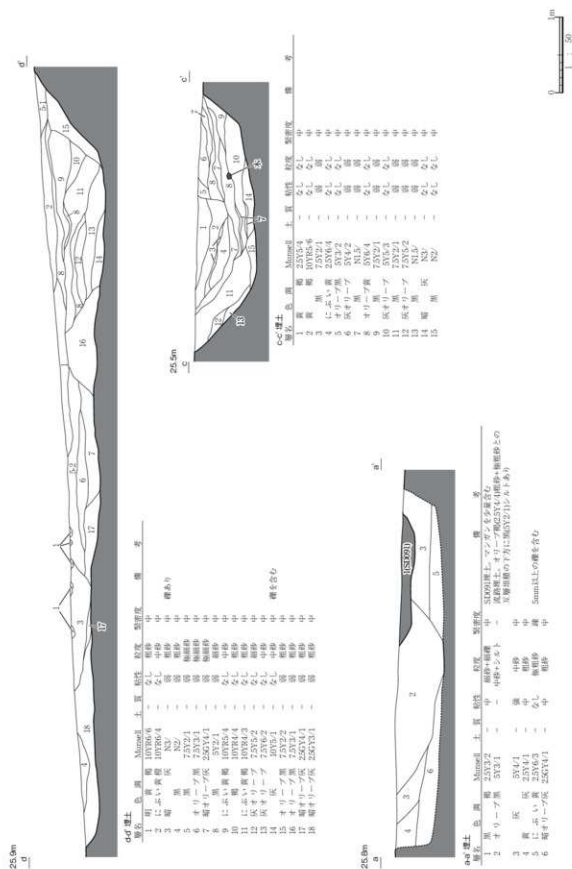


图200 SR02 断面 2